# 2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

| 所属学部　学科 | 職位 | 氏　　名 |
|---|---|---|
| 経営学部 地域ビジネス学科 | 教授 | 伊藤 恵美子 |
| 最終学歴 | 学　位 | 専門分野 |
| 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了 | 博士<br>（学術） | 日本語教育学 |

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

自律的行動のできる学生の育成

（目標）

受講生一人ひとりが受講開始時より確実に学力が向上し、人間的にも成長して校訓「真面目」が自律的に行え、「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」になるよう指導する。

（方針）

周囲に目配りして自主的に動ける、相互合意したルールを遵守できる人間に成長してほしいので、大人として日々対等に接する。

（計画）

教職員の心構え「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事うるの職分なり」を常に念頭に置き、近年学力の二極化が顕著な本学の実情に勘案して、個々の学生に対する指導（長期休暇中の研究指導等）の見直しを不断に行っていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

日本語表現Ⅰ、アカデミック・ライティング、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

日本語表現Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

自ら情報を取りにいくことができない学生を支援するために、2021 年度後期授業後の春季休暇から 2022 年度卒業に至るまで、4 年生の「専門演習」は学生を 3 つのグループに分け、各グループのリーダーから情報を伝達する仕組みを作った。仲間の横のつながりに、リーダーからの縦の情報網を掛け合わせて、IT リテラシーの低い学生を救済するとともに、学生の相互学習を促すことにしたのである。その結果、グループ内のピア・ラーニング（協働学習）が促進され、学生は対話のプロセスで学びを深めて成長していった。その詳細は「卒業研究の教育的効果：その軌跡を学生の意欲から分析して」としてまとめ、『東邦学誌』第 52 巻第 1 号に投稿した。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

2020 年度から 2022 年度の 3 年間、新型コロナウィルス感染症のパンデミック下にあった。この間、現代テクノロジー（オンライン授業 Meet 会議）を駆使しながら、大学教育の原点（教授者と学生、及び学生同士の対話）を大切に、担当科目を可能な限り対面授業で行った。教室でクラスタを発生することなく 2022 年度の授業も無事に終えられたことを評価とする。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

（1）応用言語学の課題「第二言語教育のコミュニケーション能力の育成」（究極課題）

（2）応用言語学の課題「第二言語習得と母語習得」（究極課題）

（3）大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」（継続課題）

○目標・計画

（目標）

コロナ禍で学会活動等に制約を伴っているが、周辺分野の最新の研究動向を可能な限り把握して研究課題に挑む。

（計画）

（1）母語とアイデンティティの関係を分析する。

（2）言語習得の射程を広げて考察する。

（3）アカデミック・ライティングについて実践、及び分析をさらに進める。

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

なし

（学術論文）

・伊藤恵美子「アカデミック・ライティングに向けて：ビブリオバトル導入の試み」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 46 巻第 1 号、2017 年 6 月、81-95 頁

・伊藤恵美子「台湾人」という意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 45 巻第 1 号、2016 年 6 月、79-89 頁

・伊藤恵美子「外国人留学生の日本語学習の歩み：入学後 2 年間を中心に」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 44 巻第 1 号、2015 年 6 月、43-62 頁

（学会発表）

なし

（特許）

なし

（その他）

・伊藤恵美子「コミュニケーション能力の萌芽：言語習得を幼児の母語習得の側面から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 46 巻第 2 号、2017 年 12 月、169-176 頁

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

日本語教育学会会員、社会言語科学会会員、留学生教育学会会員、日本コミュニケーション学会会員

○自己評価

2022 年度も新型コロナウィルス感染症のため、感染者や濃厚接触者が五月雨式に現れ、授業欠席者のフォローアップが欠かせない１年であった。国際学会は再びの延期が続き、国内でも歴史が長く会員数の多い全国規模の会議はオンラインが主流であった。オンライン会議は出張の移動時間がかからず手軽に参加できるため、全国大会に限らず学部レベルで主催されたシンポジウムや高名な先生の最終講義を拝聴することができ、２年ほど遠ざかっていた研究課題「第二言語教育におけるコミュニケーション能力の研究」の最前線を部分的ではあるが、確認することができた。昨年度の春期休暇から指導を開始した 2019 年度入学生の卒業研究の過程と教育効果を、前述のとおり『東邦学誌』第 52 巻第 1 号に投稿した。このように、大学教育の重点課題「アカデミックスキルの養成」を着実に進めた。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

2022 年 3 月 16 日付「2022 年度学務分掌」に基づき、研究活動委員会、及び研究倫理委員会の主たる業務に貢献する。

（計画）

本委員会 3 年目になるので、本学及び教員の研究活動の活発化を図り積極的に活動する。

○学内委員等

研究活動委員会、研究倫理委員会

○自己評価

毎月の定例の委員会、及び緊急時のメール会議にすべて出席した。学会誌の査読経験を踏まえて、『東邦学誌』第 51 巻に投稿された論考 2 本の校閲を行った。

また、学内委員とは別に、10 月 26 日の大学機関別認証評価の実地調査で日本語表現Ⅱが指名を受け、調査員の授業見学が行われた。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

大学教員として科学的研究を進め、研究成果を広く社会に還元する。（継続目標）

（計画）

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。（継続計画）

○学会活動等

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。（継続計画）

○地域連携・社会貢献等

地域連携には該当せず

○自己評価

日本語教育学会学会誌『日本語教育』の査読に 2009 年から携わり、2013 年に学会誌委員会委員の主査（世界で 30 人）に就任し、世界中から投稿される論文の査読を行っている。2022 年度は『日本語教育』への投稿論文１本の査読に携わった。今後の学術の発展、及び日本語教育学の研究促進を世界最高レベルで担っており、大学教員として社会貢献を十分に果たしてきた。学会活動は、広告のような商業ベースと異なり、高等教育機関としてあるべき本来のアカデミックな側面であり、中堅大学を目指す本学の知名度向上に貢献するものとして、高く評価できよう。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

クレド「人間としての尊厳を持ち、前へ進む」を携え、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に向けて、学生が課題達成に向けて協力して取り組み、互いに貢献できるように、担当科目を通して指導を重ね、その教育的効果の考察に至った。

Ⅵ　総括

新型コロナウィルス感染症による制約が依然として継続しており、教育活動は緊張感が持続したままであるが、研究活動はオンライン会議に参加するなど徐々に再開しつつある。大学運営・社会貢献は例年どおり粛々と行った。

以上